

現在の日本の大学における情報発信のあり方*

—機関リポジトリを中心に—

日向 智子（学籍番号 200621331）
研究指導教員：逸村 裕
副研究指導教員：宇陀 則彦

1. 研究の目的

1990 年頃から、大学図書館界では電子図書館に対する議論が盛んになり、多くの文献が発表され、その構築に様々な手段がとられてきた。しかし現在では電子図書館に関する議論は機関リポジトリに関するものが中心となっている。

本研究の目的はその変化をたどると共に機関リポジトリを中心とした大学からの各種コンテンツを分析検討し、今後の大学からの情報発信を考察することにある。

2. 先行研究

2.1 電子図書館

1990 年代の電子図書館とは、資料と情報を電子メディアによって提供することであった。その内容はインターネットの出現と普及と共に変化を遂げていった。インターネット上の図書館システムやサービスは virtual library あるいは digital library と呼ばれるようになった[1]。

2.2 電子図書館プロジェクト

学術情報流通を支える基盤としてのネットワークが整備されつつある状況を踏まえ、1990 年頃から電子図書館に関わる政策文書が多く出された。1993 年、ネットワークと電子化情報を図書館で有効活用すべく、学術審議会学術情報資料分科会学術情報部会から「大学図書館機能の強化・高度化の推進について(報告)」が発表された。同時期に奈良先端科学技術大学院大学では全資料を電子化して利用者に提供する電子図書館システムの構築が始まっていた。同大学には 1995 年度、構築のための予算が付与された。さらに 1996 年には学術審議会から「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について(建議)」が発表され、1997 年度から 1998 年度の先導的電子図書館プロジェクトでは 6 大学、2000 年度には先のプロジェクトを踏まえ、補正予算による取組が 10 大学で始まった。

以上の 16 大学に共通していることは、大学図書館が所蔵する資料や目録所在情報、データベースへのアクセスなどを電子図書館として提供した点である。

2.3 情報発信への転換

同時期、シリアルズ・クライシスの顕在化と共に電子ジャーナルが急速に普及した。これらに対応した 2002 年の科学技術・学術審議会研究計画・評価分科会情報科学技術委員会デジタル研究情報基盤 WG による「学術情報の流通基盤の充実について(審議のまとめ)」が電子図書館政策のターニング・ポイントとなった。ここでは 1990 年代の電子図書館構想が継承されているものの、情報発信の重要性が説かれている。電子化の遅れを指摘すると同時に、情報発信はポータル機能を整備し、メタデータ等の二次情報を付与することで可能となる、と述べている。大学図書館はコンテンツのデジタル化が遅れているので早急に対応すること、図書館のウェブサイトをポータル化し、横断検索を可能とするなどの必要性が述べられている。

2003 年文部科学省研究振興局情報課による「学術情報発信に向けた大学図書館機能の改善について(報告書)」は前年の「審議のまとめ」で提唱された学術情報発信やポータル機能の具体例を取り上げており、貴重書の電子化などに代表される電子図書館的機能は少なくなった。電子図書館構想は大学からの学術情報の発信へとその中心を移していく。

3. 調査方法

本研究は国内外の機関リポジトリの傾向を分析することにより、その特徴を明らかにすることとした。日本の機関リポジトリのコンテンツ数は、国立情報学研究所の「次世代学術コンテンツ基盤構築事業 中間まとめ」及び JuNii+ から引用した。

海外の機関リポジトリについては、2007 年 7 月 29 日から 12 月 21 日かけて海外の各機関リポジトリにアクセスし、Article, Thesis などのコンテンツの内容調査を行った。

4. 結果

4.1 日本の事例

調査の結果、平成 18 年度作成全数 212880 件中、学術雑誌論文 12591 件(6%)、学位論文 4469 件(2%)、紀要論文 98356 件(46%)であった。これを見ると、いわゆる灰色文献が多いことが目につく。2005 年から国立情報学研究所は「次世代学術コンテンツ基盤共

* “Information dissemination from universities in today's Japan: Focus on institutional repositories” by Tomoko HYUGA

同構築事業」として機関リポジトリの構築支援を行っている。日本の大学図書館には、1990年代の電子図書館構想で作成された貴重資料などが存在しており、日本では学術的なコンテンツとともに機関リポジトリの主要コンテンツとなっている。

4.2 海外の事例

調査対象とした13大学の機関リポジトリの種類は、全276114件中、学術雑誌論文83059件(30%)、学位論文39849件(14%)、大学からの刊行物33348件(12%)であった。但し、個々にその種類は大きく異なっていた。

これらの結果、各機関リポジトリに登録されているコンテンツは多様であり、機関リポジトリを運営する大学の特色を出しているともとれる。簡単にまとめると、(1)Articleを重視(2)Thesis,Degreeを重視(3)大学からの刊行物を重視(4)その他(写真やReport,Interviewなど)といった内容である。

4.3 機関リポジトリのコンテンツの現状

国内外ともに機関リポジトリのコンテンツは多様な状況にある。現状では各大学にとって発信しやすいと判断されたコンテンツが主となっている。

なお、日本において次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業での公募では、2008年度の機関リポジトリはこれまで電子形態での流通が遅れていた学術的コンテンツに重点をおく、と発表している。これは機関リポジトリの中期的な方向付けにおいて重要な役割を果たすと考えられる[2]。

5. 考察

5.1 機関リポジトリの今後

現在提唱されている新しい情報提供のあり方は、機関リポジトリのポータルサイトを構築し、そのポータルサイトを通じて情報を得る方法である[3]。

日本では機関リポジトリのポータルサイトとして国立情報学研究所のJuNii+が試験運用中であり、2008年1月8日の段階での参加機関数は50である。今後機関リポジトリ数が増加するにつれ、JuNii+への参加数は増加する。かつてNACSIS-CAT/ILLが日本の大学図書館において、目録や資料を補完する上で必要不可欠な存在となったように、各機関リポジトリをつなぐJuNii+はサービス内容を少しずつ変えながら日本の大学からの情報発信にとって必要不可欠な存在となるだろう。しかし、機関リポジトリのポータルサイトはあくまでそれ同士をつなぐものであって、検索対象はそこに登録されたコンテンツだけである。

今日、ウェブ上で見つからない情報は存在しないことと同義ともいえる状況にある。機関リポジトリに登録されつつある大学からの生産物は見つけられ、利用されなくてはその価値を發揮しない。いかなる検索から

も情報を見つけられるようにするためには検索対象を広げる必要がある。機関リポジトリも含め、学術情報発信のあり方を考え直す時期にきている。

本研究では機関リポジトリを既存の情報検索システムであるOPAC、NACSIS-CAT/ILL、Googleなどの既存情報システムと連動し、大学からの情報発信に用いることを提案する。検索対象が異なる既存の検索システムが機関で統合され、それらがすべて一度に検索できるようになったときに新たな学術情報流通基盤が完成するといえよう。

機関リポジトリ運営の中心的役割を担う大学図書館の当面の役目は、多種多様なコンテンツを数多く収集し、利用者を機関リポジトリへと誘導することではないか。機関リポジトリは新しいシステムであるが、教育・研究支援のために資料を収集し、検索のためのメタデータを付与し、恒久的に保存し、的確に提供するという大学図書館の基本姿勢は変わらない。

5.2 大学からの情報発信

大学から発信される情報は、学術情報以外のものも多い。機関リポジトリは「大学のショーケース」として機能することが期待されており[4]、機関リポジトリを見れば大学の特色が判断できるようなコンテンツを登録する必要がある。

機関リポジトリは、かつては一般流通に乗らなかつた灰色文献やなど様々な情報を発信できるという側面をもち、大学にとっては新たな強みとなる。

機関リポジトリが成功するかについては、機関からの情報発信の説明責任が大学評価の観点からどのように評価されるかが大きな要件となる。大学評価の観点から機関リポジトリをみると、大学の中期目標・計画において達成すべき項目の一つとして設定されている大学も見られるようになっている。

大学が持っている情報をコンテンツとして発信できる機関リポジトリは、大学からの情報発信という面で優れた働きをする可能性は十分にある。

文献

- [1] 日本国書館情報学会用語辞典編集委員会編. 国書館情報学用語辞典. 第3版. 東京, 丸善, 2007, 286p.
- [2] 国立情報学研究所. 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業機関リポジトリ構築連携支援事業 平成20-21年度委託事業公募要項.
http://www.nii.ac.jp/irp/info/2008/kobo_yoko2008-2009.pdf
- [3] 竹内比呂也. “大学図書館の現状と政策”. 逸村裕, 竹内比呂也編. 変わりゆく大学図書館. 東京, 勁草書房, 2005, p.3-18.
- [4] 村上祐子. “機関リポジトリの今”. 東北大学機関リポジトリシンポジウム開催報告. 2006-10-16. <http://www.library.tohoku.ac.jp/tohokuchiku/sympo/img/murakami061215.pdf>